

## 2 最高のプレゼント

(ああ、緊張するな……)

ただの幼なじみから許嫁いいなすけになると、ただ部屋に入るだけでも緊張を隠しきれない。

(でもなんだろ。部屋に來い、なんて……)

亮輔たちとの対面も終わり、リビングから出るとき。なぜか静乃から、沙姫の部屋に夜中に来るようにと言われたのだ。どうして沙姫の部屋なのかよくわからないし、用件も特に教えてもらわなかったから、少し不安がよぎった。

なんととっても静乃なのだ。

扉を叩くと、やや間があつてからかほそい応答の声があがる。それが沙姫なのか、それとも静乃の声かは判別できなかつた。

「入るよ」

断りを入れて入室する。部屋は真つ暗だった。闇に慣れていないだけに、目の焦点が合ってくれない。

(ん、なんだろう……甘い匂い……またクッキーかな?)

鼻孔を撫でるかぐわしい甘香。

(もしかして、夜中のお茶会?)

以前に夕方のお茶会なるものを開こうとしたことが静乃にはある。夜中のお茶会がまったくありえないことだとは思えない。

昇は自分の居場所さえ見失ってしまいそうな暗がりのなか、手探りで電気のスイッチをつける。

「！」

部屋の暗闇が一変し、眩しい光のなかに呑みこまれる。暗闇に慣れかけた瞳をすぐめ、昇は目をこする。そしてようやく視界が馴染んでくると、目の前にひろがる光景に声を出しそうになる。

「さ、沙姫……」

「しよ、昇っ」

目の前には抜けるような白い肌を隠すことなく見せる沙姫。

「しよちゃん、どう。沙姫ちゃんは」

ふふふと笑いながら、スリッパ姿の静乃が顔を出す。つづいてメイド服姿の耀子、スーツ姿に決めた異美も現われる。

しかし昇の視線はどうしてもベッドの上の沙姫から離れない。彼女は胸やお腹、そして秘部をまるでケーキのように、生クリームやイチゴなどでデコレーションしていたのだ。

温かみのある体臭と、チョコやクリームから立ちのぼる甘い香りが混ざり合って、芳しい色香になっていた。

「た、誕生日、お、おめでとですわ。……昇」

沙姫は顔を真っ赤にして、じっと昇を見てくる。眉は悩ましげにたわみ、瞳は艶やかに潤んでいた。

「びっくりしたでしょ、今日はしようちゃんのお誕生日。沙姫ちゃんがプレゼント」「あ、ありがとう……ご、ございます……っ」

少年はあまりに魅力的な光景を前にして、ようやくその一言を絞りだした。

「さあ。しようちゃん、召しあがれ……っと、その前に。耀子ちゃん、巽美ちゃん」

「さあ、昇様、お洋服を」

「ご主人様、脱いで」

耀子と巽美がそろって、昇へと近づいてくる。

「しょ、昇様!? ご、ご主人様!?……って、どうしたんですか、耀子さん、巽美さん、そんな変な言い方……」

まるで主人に対するほどのていねいさで服を脱がしていく使用人二人。

「当たり前ですよ、沙姫様と婚約なされたということは、私のご主人様になれる方ですもの。昇様、というのは当然です」

た誕生日

おめでとうですわ  
……昇



耀子が深くうなずきながら言う。

「朱雀大路の家に入るんだとしたら、まあご主人様なわけだから、そう呼ぶのは当たり前前、だろ……?」

異美も同調。

「——って、二人は言ってるけどね。二人とも、すっかりしよちゃんのこと好きになっちゃったみたいよ。たぶん、しよちゃんのおチン×ンには、女の人を魅了しちゃう力があるのね。ふふ……モテる男の子は大変」

異美と耀子はハツとしたかと思うと、頬を赤らめた。

「昇様。さ、おみ足を……はい……さ、次は下着を……」

「あ、あのそこまでしなくてもっ」

「いいえ、昇様。これがメイドの役目です……から」

耀子はいねいながらも有無を言わさないもの言い少年を黙らせると、ベルトをはずし、チャックをおろす。本当に手際よく、メイド長としての力を発揮する。あれよあれよという間に脱がされてしまう。

「ほーら万歳しろ……ご主人様……。ん、綺麗な耳だな……あむ」

異美は少年をからかうように万歳させながら衣服を脱がせて、耳を甘く噛んでくる。ゾクゾクッと興奮のさざ波が体のなかを泳いだ。